



TITLE:

各地のたより

AUTHOR(S):

CITATION:

各地のたより. 天界 1938, 18(210): 391-392

ISSUE DATE:

1938-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167715>

RIGHT:

各地の
た　よ　り

大阪支部通信

□第3回天體觀測講習キャンピング，
期間8月自2日至8日，會場南海沿線「助

大阪支部通信
9月例會
そ　の　他

松」田中宗愛博士邸園内，太陽黑點・月面・遊星面・黃道光・流星・變光星等の眼視觀測の實地講習會とキャンピングとを實施，參加者15名に及び，5日夜より6日朝，6日夜より7日朝にかけての快晴に天體觀測の指導を受ける，期間中3日夜はプラネタリウムにて小嶺孝二郎氏より流星，笹部榮一氏より黃道光と變光星の觀測法の講話と特別演出を見，後刻8月例會として座談會に移る．5日宵には善隣館男女生徒キャンパ1に，6日宵にはボーイ・スカウト・キャンパ1に約300名に天文講演と天體觀望を試み盛況，只期間中5・6日を除いて曇雨天で充分に天體觀測のできなかつた事は遺憾の極みであった．使用望遠鏡　11糎屈折赤道儀，15糎・8糎反射各1基宛．

□支部役員會(8月20・21日)　場所を爽涼の生駒山上にて開會，銀河第2巻第5號の編輯を爲し，後刻携行の15糎・8糎反射經緯臺及び11糎反射赤道儀にて木星・土星等の遊星面觀測，折柄の納涼客にも公開し盛況，今回の會合も昨夏の生駒山上の第2回天體觀測指導キャンピングに於ける天體觀測地としての檢分の再檢討を爲したものである．出席者9名．

□天界副讀本「銀河」第2巻第5號は堂々の内容で9月5日發行，目次は表紙「田中博士と愛機」，口繪「8月の満月」伊達撮影四倍引伸燒寫眞，扉「李太白詩集より」，卷頭言「天文用語審議會開く」，指導記事「星宵のつれづれ」K. Y. O. 理學士，「觀測の生理學」(2) 江原醫學士，「反射望遠鏡の特質と使用法」伊達半乾き泥土の斑紋」鐵道技師S生，「簡易バロー・レンズと其効用」青木章，「曆」(1) S. D. 生，「追悼小山理學士」木邊成麿，「小山氏を悼む」津久井修，「天聲人語」天津保志男，「星座名の『ジラフ』に就いて」飯塚理學博士，「カノープスを見る」(恒星天文學的に)老人星，編輯後記其他天界新知識・誌上マーケット連載．(猶ほ特に故小山理學士の寫眞1頁附録)．

□「星座名對照表」に支那名・スペイン名を増補，此別刷丈御希望の方は切手6錢同封御申込み下さい．

□支部報第42號(9月1日附)用紙3枚，160部發送．

9 月 例 會

10日18時半より、大阪市南區心濟橋のをぐら屋にて、豫定通り開催、京都からは、故小山氏の舊友の諸先生を始め、大阪神戸の會員多數出席して盛會であつた。先づ座長に西森氏を推して、例會に入り、「故小山氏の追憶」と云ふ題のもとに木邊氏が話し、次で舊友の諸先生の御話があつた。其の後、會員中に追憶の言を呈するもの數名、終つて、特に、小山先生の生き姿の記録たる木邊氏所藏のペテ・ベビ・フィルムの影寫を行つて、齋として今は無き先生の靈に捧じた。散開は22時。

山本會長　去る8月の國際天文同盟第6回總會へ、黃道光部長として、遙々渡歐された當會々長 山本一清博士は、無事ストックホルムのプログラムを終へて、目下歸朝の途次にある。多分10月中旬(日は未定)には横濱へ到着されるだらう。何分電報以外の通信は、殆んど出来ない現在であるから、正確な最近の行程に就いては知り得ないが、續々旅行記が到着するし、又歸朝後は、いづれ歐米の新しい天文學界の動向等に、御土産は澤山あるものと思つて居る。其等は總會、例會の席上、又は本誌に次ぎ次ぎと發表される事になる筈である。

口繪眞寫に就いて　本當は先月號にすべきものであつたが、もう校正が進んで居た爲に出来なかつた。裏面を故意に白紙にしたのは、切り取つて小額に入れ得る様の爲めである。

總　會　未定であるが、山本會長歸朝後、大阪邊りで開催し度い、多分11月と思はれる。いづれ會長歸朝後に正確に決定する。

編輯後記　閑だから暑いと云ふ俗説は受け入れられないにしても、紙面には寒露を思はせる10月號も、正直な所、ハダカで編輯したものである。18卷は本號で終つた。前號には種々な未校が残つて申し譯無い。目下何しろ非常時である。9月から新聞雑誌は2割位の減頁を云ひ渡された。但し其れは編輯者の良心に委ねられて居たのである。天界も會員諸賢には申し譯なかつたが、やはり良心上4頁を割愛した。及ばない編輯の上に、更に減頁は辯解の域を越へて居るが、宜しく御諒承賜はり度い。いづれ次號からは卷も更新するのだから、會員の頁でも作つて六號活字を増加しやうと思ふ。そうすれば結局内容は増加するから、減頁分は取り戻せよう。又最も編輯者の苦心するのは、如何なる記事、又具體的にはどの記事が最も讀者の氣に入るか云ふ事である。いづれにしても本誌は會員の本である。諸賢の中に御意見又は御氣付きの點ある方は、何に依らず拜聴したい。中には全く相反した意見が來て取捨に迷ひ、結局は一方の方には猶更御不滿を與へる事になるかも知れないが、其の點は良く御含み置きの上、御遠慮なく御聞かせ願ひ度い。勿論匿名で差支へない。物事は一朝一時に出来るものではない。これは平凡な僕の信念である。(木邊記)